

2021 年 1 月から 12 月に実施した事業

1. 書の文化の伝承

◎第 12 回大仏書道大会「書くことは楽しい in 奈良」を開催

実施日 令和 3 年 10 月 23 日（土）～24 日（日）

会 場 東大寺大仏殿西回廊

10 月 23 日（土）から 24 日（日）の 2 日間、東大寺大仏殿西回廊に於いて「第 12 回大仏書道大会」の書道展を開催しました。本年も、コロナ禍での開催となり、三密を避けるなど感染拡大防止策を講じての開催となりました。

当書道展は、平城遷都 1300 年を記念して開催以来毎年実施しており、今年で第 12 回目を迎えました。単なる教科書的な技術だけではなく、自由な感性、創造性や味わい深さなども加味し、書の可能性を感じさせるような作品に光をあてる稀有な大会として、全国から毎年多数の応募をいただいています。今回もコロナ禍で学校の行事日程の変更や部活動が制限されるなど、作品の募集に大きな影響が出るものと案じられましたが、関係する多くの方々のご協力もあり、全国 80 の高校・大学から 1,178 点の応募を頂くことができました。

同書道展にさきだち 10 月 3 日には、朝日新聞社奈良総局において森本公誠・東大寺長老（当フォーラム理事・特別顧問）を審査委員長に迎え、高校や大学の書道教員の方々に審査に携わっていただき、7 点の特別賞と 93 点の入賞作品を選定しました。

筆で書く楽しさが伝わってくる作品、若者らしい意欲的で力強い作品など個性を発揮した作品が数多く見られました。また、優れた作品を多数応募された団体に贈られる奨励賞には、兵庫県立小野高等学校、明照学園樹徳高等学校の 2 校が選ばれました。今年も受賞作品 100 点を大仏殿西回廊に展示し、入選者や学校関係者をはじめ参拝客や観光客の方にも観覧していただき、650 名余りの来場を得ました。

なお、24 日に開催を予定しておりました席書会は新型コロナウイルス感染拡大防止策として、三密を避けるため、関係者と協議し中止いたしました。

展覧会（大仏殿西回廊）



審査会（朝日新聞社奈良総局）



☆特別賞 7 点の紹介



奈良県知事賞「飛躍」

濱下 陽さん（埼玉県立越ヶ谷高等学校）

私たちは紙からはみ出してはいけない、曲がってはいけない、印は左の下の方と思いがちです。この作品の作者は、このようなことに囚われず、言葉のイメージを膨らませ、自分にしか書けない「飛」を書く、そんな自己表現に挑みました。メタリック墨液を使っています。縦線をより強調するために他の点画を上部に集中させ、左右に広い余白を作りました。印もあえて片向けましたね。ブラヴォー～！



奈良県教育長賞「道」

三村 竜雅さん（新潟県立新津南高等学校）

穂先の長い柔らかい筆（羊毛長鋒）の上部を持って書いたのでしょう。書き易い剛毛筆では出ない躍動した線になりました。禅宗の始祖とされる達磨の絵は表情豊かで、書の線同様のいきいきとした線で描かれています。「七転び八起き」を連想させ、卒業を前にした作者の気迫が伝わるようです。お気づきでしょうか、右下のピンクの点です。なくてはならない効果的なものとなっています。



奈良市長賞「ときには、のんびりゆったり、のほほんと」

長谷川 そらさん（新潟県立新津南高等学校）

クルリと回転する二つの「の」、文字通り全体にゆったりとした書きぶりです。筆圧の強弱が自由自在で、線の太細、文字の大小が自然に表現され、平仮名ばかりとは思えない変化に富んだ書になりました。言葉に対応するようにほほ笑むおじぞう様は淡墨です。上部に描かれているのは祠の屋根でしょうか、錫杖のくるくるした線もリラックスした筆使い、キャンディーのようでいいですね。詩書画一体となった若者らしい仏画といえるでしょう。



奈良市教育長賞「蓮の花と共に」

臼井 ゆうさん（静岡・浜松啓陽高等学校）

軽快なタッチで描かれた淡い色調の下絵、その花の芯を避けてご自分の言葉を変化のある「散らし書き」で綴りました。日本の未来に願いを込めた簡素な文、その最後に「祈願」の二文字が加

わり、名前は小さく入れた好感の持てる作品です。絵と書を一つの世界として構成する力があり、まとまっています。きっとよい世の中がやってくる、そんな希望の風が吹いているようです。



東大寺賞「私の佛を育てたい」

徳政 あいかさん（広島県立日彰館高等学校）

作品づくりにあたっては先ず「何て書こう…」と頭を悩ませますね。「自分の仏、心の中の仏を育てたい」こんな文言が出てきたことに感動です。森本長老は、聖武天皇もこのようなことを説いておられる、と「東大寺賞」に選ばれました。このサイズに一行書きは収まりにくいものですが、旧字体の「佛」を用い、蓮弁を抽象化した淡墨の丸の上に大きく座らせました。そんな工夫によって非凡な一行書きとなりました。



朝日新聞社賞「鴻志」

大野 詩織さん（京都・花園大学）

「鴻」は大きな鳥のことです。大きな志(挑戦)という思いを紙面いっぱいにぶつけましたね。大学生の作者は「隸書」を学んだのでしょうか。その中でもより自由な「木簡」の筆法を用いました。中央に力強く伸びた線は空間をかかえ込み、堂々としています。用具用材の選択は大事です。作者は太く柔らかい筆を選び、その機能を発揮しました。逆筆に筆を扱い、筆は開き割れたようになった筆跡から、作者の意志が伝わってきます。



奈良 21 世紀フォーラム理事長賞「ソーシャルディスタンス」

池田 野乃花さん（静岡県立静岡城北高等学校）

短い文は自由律俳句かキャッチコピーのようでもありコロナ禍ならではの願いが詰まっています。書き出しを下げ「あ」の下に余白も取って、丸い集団として上部に上手くまとめました。穂先のきいた線は美しく特に「め」「あ」「の」の伸やかな曲線が見せ場ですね。2メートルと漢数字(二メートル)でないのが高校生らしく今風です。大仏さんとアマビエがおしゃべりしているのでしょうか。楽しく希望がみえる作品となりました。